
月影のDOLL

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月影のDOL

【ZPDF】

Z0312F

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

将也は小学四年生まで住んでいた地に15年振りで降り立った。出張の為に住み出したアパートで、彼は度々見る悪夢に悩まされていた。そんなある日きれいな黒髪の少女と知り合ったが、彼女は将也に対してやけに積極的だった。しかし、ふとした事で将也は疑問を抱く。彼女の着ている制服はいったい何処の高校のものか？この町で同じ制服を全く見かけないので。そして将也は夢の中の少女が誰かに似ている事に気付く。

一ノ夜【開拓地】（前書き）

この作品は『ひつひ』とこいつタイトルで執筆したものを加筆修正したもので

コトコトホラーではなく、どちらかと言えばロマンスホラーなので、

通常作品の延長でお読みいただけると幸いです。

1ノ夜【開拓地】

「あたしを捨てたわね」「知らない、俺は知らない」

「あたしの事、覚えてもいないの?」

「キミなんて知るもんか。それに、俺は女性をふつた事かんか無い」

「覚えていないのね……」

黒光りする長い髪が風ではためいて、無数の毛先が生き物のよう
に宙を舞う。

真っ白な顔はピントがボケているかのように輪郭がぼやけて、目
鼻の形はよくわからない。

ただ、言葉を発する唇が確かに動いているのは判った。

「でも、きっとまた逢えると思つっていたわ。それなのに、あなたは
覚えていないなんて……」

「覚えているも何も、俺は忘れるほど多くの女性とは付き合つてい
ない」

「あたしを捨てたくせに……」

「きっと人違ひだ。キミは人違ひをしているんだ」

女性の顔をよく見ようとしても、白い肌以外は朧氣でどうしても
細部を確認する事は出来なかつた。

「自分のした事を忘れたくせに……」

「キミは誰なんだ。いったい俺が何時キミを捨てたと言つんだ?」

「思い出して。自分で思い出しなさい」

長い黒髪は大きくうねる様に伸びて、彼の顔に纏わり着いた。そ
の何本かが首に巻きついて強く締め上げる。

顔は口も鼻も覆われて呼吸が出来ない。

もがこうにも身体が自由に動かない。

自分の身体が自分のもので無いかのよつて運動神経が上手く伝達
されない。

息苦しさの限界に達して、渾身の力を振り絞った。

「うおおお……」

中村将也は布団を跳ね除けるよじ立てにして、ベッドの上で飛び上がる勢いで上体を起こした。

大胸筋の中央には玉の汗が浮かんでいた。

カーテンをすり抜けた月明かりが微かに部屋の中を照らし出して、DVDデッキの小さなデジタル時計の表示がやけに鮮明に輝いている。

彼はここへ越してきて以来、幾度と無く同じ夢につなされていました。見覚えの無い女性、いやまだあどけない少女にも見える女が、自分を捨てたと攻め立てる。

将也是毎回同じ応えをする以外にない。

自分には全く見えが無いのだから。いや、見覚えが無いも何も、田鼻立ちがどうにも驕氣ではつきりしない為、その女性を認識する事が出来ない。

それでも、自分から女性を振った事が無いのは本当だった。だから、彼女がどんな顔をしていようとも、将也是堂々と否定できる。彼は大手建設会社で屋内配線工事の部署にいる。新しく都市開発される事になつた小さな地方都市に長期出張で来ていた。

環境の変化が、いや今までこんな事は無かつたのだが……今回に限つてそれが原因なのだと思った。

ある地方都市……ここは将也が小学校の四年生頃まで住んでいた土地だ。

その頃は雑木林がいたる所に存在し、小さな堀にはメダカやザリガニがうじゅうじゅいた。

しかし、新たに都市開発が進められる故郷は、埋め立て尽くされた田畠に伐採された林、昔の記憶を辿つてもその面影は無かつた。

区画整理も行われて、将也の記憶にある住所は無くなっていた。

新しく表記された地名や番地はまったく判らない。

ただ、通つていた小学校は数年前に建て替えられたものの、昔と同じ場所に在つた。

といつても、変わり果てた周囲の景色にその位置関係がうまく思い出せなかつた。

将也の一家はここを後にして茨城に移り住んだ。その後彼は千葉の大学で電気工学などを学んで今の会社へ就職した。

将也の会社が用意した住まいは普通のアパートだった。

白い外壁で覆われた木造モルタルの一階建。各部屋には小さなベランダも設置されている。

十一室ある内、二階部分の六部屋を全て会社で借り切つている。すなわち、同じ階に住む住人はみんな会社の同僚だった。

もちろんそれだけでは足りないので、あちらこちらのアパートに会社名義で契約した部屋が在る。

同社からこの街に来た社員は全部で一十名。他は派遣会社からの人材で頭数を揃えている。

朝六時に起床して、七時には現場へ向う。

車で十五分ほどの場所に大きなショッピングモールを建設中で、その屋内配線全てが将也たちの受け持ちだ。

作業開始は八時からだが、下準備もある為に余裕を持つて家を出る。同僚は二十代で同じ世代だった。

上司である工事主任、つまり管理職者は他の役職連中と一緒に別のアパートに住宅を借りている。

もちろん、ワンランク上の住まいだが、ほとんどは妻子持ちでありながら単身で出張している為、それくらいは多めに見てあげないとかわいそうでもある。

朝早い変わりに終業時間も早い。

通常は五時、遅くとも六時には終わる。ただ、それは今だけの話で、建物の完成が近づけば仕事は押しに押されて毎日夜の十時過ぎまで残業続きとなるのが当たり前だ。

ちゃんと予定表に沿って作業しているにも関わらず、何故か毎回最後は突貫工事になってしまふから不思議だ。

「しかし、こんな所にこんなでかいモールなんか作つて客集まるのかね」

工事現場に仮設されたプレハブ小屋の仮設事務所の隅で、陽差を浴びながら昼食をとつていた同僚の佐々木信一が広大な埋立地を眺めて言った。

「隣やそのまた隣の町も商圈に入つてゐるらしいよ」

一緒に昼食をとつていた将也が同じく埋立地を見渡す。

ショッピングモールの敷地だけでも異常な広さを占めているが、その周辺にもこれから出店する大型店舗の建物が建設中で、あちらこちらに鉄骨が立ち並ぶ。

そして埋立地はさらに遠くまで伸びてゐる。

近年増えだした地方型の高速道路も建設中で、埋立地の上に幾つもの基礎土台が造られている。

「お前、ここのは出身なんだつて？」

信一が言った。

「出身つて言つても、小学四年の時に引っ越したから」「じゃあ、ずいぶん変わつたろ」

「もう何処がどこだかわからんないよ」

記憶にある田畠の大半はさら地に変わり、釣りをした堀もコンクリートで固められた水路に変わつていて。

その水路が昔の堀だったのかどうかも実際は定かでない。初夏の熱い陽光が降り注いでいた。

外壁をまとい始めたモールの建造物は要塞のように聳え建ち、大型クレーンのアームが青い虚空に向つて伸びている。

将也はコンビニ弁当のから揚げを口に運びながら、その先を眩し

そうに見上げた。

2ノ夜【うしろ姿】

将也の同僚である佐々木信一は早々に帰宅したアパートの階段を上っていた。上りきった通路に何かが落ちている。いや置いてあるのか？

信一は腰を屈めてそれを見ると、首を傾げた。

「何だ、これ？」

そこには肌の白い黒髪の人形が在った。

足の関節を折り曲げて地べたに足を伸ばして座るような形で置いてある。

「将也のか？　まさかな」

信一は思わず呟いた言葉を自分で否定した。

おそらく下の住人に小さな子供でもいて、この通路も遊び場になつているのかも知れないと思つた。それとも近隣に住む子供か。

信一はそれには手を触れず、その先にある自分の部屋のドアを開けた。

その日将也は図面の整理をした後、定時を少し過ぎた五時四十分頃に仕事場を後にした。

大半は仕事を終えて帰つた後だが、プレハブで出来た仮設事務所では、まだ仕事をしている連中もいる。

6月も末になりだいぶ陽が長くなつた為、外はまだ充分に明るかつた。

「お疲れ様です」

予定表のチェックをする主任に挨拶をして、将也はプレハブ小屋を出た。

真新しい大通りから古い国道に出る。

昔自転車で走った記憶のある唯一の道だ。そして再び真新しい通

りへ入ると住宅地が広がる。

道路を挟んだ反対側はまだ土地が分譲中で、小奇麗な一軒家が歯抜けに建っているものの、まだまだ空き地が多い。

通り沿いにはコンビニや、建設中の中規模店舗が目に付く。道なりに走つて二つ田の信号を右折すると、少し古い住宅街に入る。

少し古いといつても、将也が住んでいた時とは全く違つた風景だ。昔は住宅街の風景そのものが何処か灰色に古ぼけていたが、いまは全体が白っぽい。

小学校の方角からして将也が以前住んでいた周辺らしい事がかるうじでわかるが、懐かしむような場所はやっぱり残つてはいない。

その住宅街の中に会社で借りているアパートがある。

家具付きのアパートはテレビも冷蔵庫も衛星放送も、そしてパソコン用の光回線も揃つている。

自分で持つて来たのは着替えと自分のノートパソコンくらいだった。

彼は浦安にある会社の寮に本住まいがある。

寮といつてもマンション形態の為住み心地はすこぶる快適で、ほとんどの社員は結婚するまでそこに住んでいる。

出張の多い仕事なので、自前で家賃を払つて部屋を借りていると、なんだか損している気分になるのも要因の一つだ。

住宅手当もあり、実費が少ないのも魅力だろう。

もちろん光熱費等は個人もちだが、それでも浦安駅近くに一万円で1DKは格安だ。

長期出張の場合に限り、自分の車を持ち込む事も出来る。地方都市は足が無いと私生活に困るからだ。

現に、今いるこの町も駅前は寂れきつて、大通り沿いに立ち並ぶ郊外型店舗での買い物は車がないとかなり不便だ。

アパートと路地を挟む形で月極の駐車場があり、各々の車はそこに停めているが、もちろん駐車場代は会社からは出ないので自分達で

支払っている。

夕飯の弁当を買ってアパートに戻った時には、だいぶ陽が傾いてほの暗さが増していた。

駐車場に車を停めると、将也はアパートへ向って通りへ出る。駐車場は緑の低いフェンスで囲われているだけで視界を妨げるものは無い。

歩きながら何となく周囲を見ていれば、道路を渡る際にいちいち安全確認をする必要なんて無かった。

それなのに彼は、車道に足を踏み出した直後に突然左から何かが迫るのを感じて身構えた。

しかし時遅く、その何かは将也の身体にぶつかった。

微かな視界の隅に、黒い影だけが一瞬見えた。

「きやつ

「痛つ」

ガシャンと音がして何かが倒れる。

一瞬閉じた目を将也が開けると、高校生くらいの少女が自転車と共に地べたに転がっていた。

制服のスカートがまくれて、街路灯に白い脚がさらされている。

「大丈夫か？」

彼は慌てて少女に手を差し伸べる。

「す、すみません」

少女はそう言いながら起き上がり紺色のスカートをほろつた。

将也は自転車を引き起こして

「いや、俺もよく周りを見ていいなかつたんだ」

少女は屈んで籠から落ちた鞄を拾いながら、乱れた黒髪を後ろにかき上げる。

「いいえ、あたしの方こそ全然前見てなくて」

夕暮れの淡い陽差に照らされた白い肌は瑞々しくきめ細かで、燈つたばかりの水銀灯の明かりさえ反射している。

艶のある黒い髪が肩を通り越して背中に掛かっていた。

立ち上がった少女は鞄を自転車の籠に押し込むと

「こここのアパートに住んでる人ですか？」

駐車場の向かいを視線で示した。

「あ、ああ」

少女は小さく笑みを浮かべると

「あたし、玲美つていいます」

「この辺に住んでるの？」

「はい」

頭を動かすたびに揺れる黒髪は、夕闇に輝いていた。

地元の高校生か……しかし、将也は玲美を何処かで見たような気が

がする。

何故か初めて会った気がしなかつたのだ。

……きっと、この通りで以前見かけたのかもしれない。

「何時もここを通るの？」

「ええ」

玲美はそう言つと自転車に乗つてペダルを踏み出した。

「それじゃあ

黒髪をサラサラとなびかせながら、彼女はすぐ先の角を曲がつて姿を消した。

その夜、将也はあの夢を見なかつた。

久しぶりに朝までぐっすりと眠る事が出来た。

そう毎日見るわけではないが、どうにも後味の悪いあの悪夢は、夜中に目が覚めるとなかなか寝付けなくなり、朝の寝覚めもよくないのだ。

翌朝将也がアパートを出ると、そこには昨日出会った少女、玲美^{れみ}がいた。

「おはようございます」

「ああ、おはよう

将也はそれがただの偶然だと思いつゝこれから学校？」少々意識して気さくに返す。

「ええ

玲美はそう言って笑うと、自転車の籠から四角い包みを取り出した。

紺色のバンダナに包まれた四角いものが何なのか、将也にも何となく判つた。

「えつ？」

しかし、どういう事なのかは判らない。

「お弁当です。何時もコンビニとかでしょ」

やはり四角い包みは弁当だった。そして自分に差し出したのだと確信した。

「でも、何で？」

「いいじゃない。小娘の作ったお弁当じや嫌ですか？」

玲美はにこやかな表情を途端に曇らせた。

朝の陽差は、昨日見た以上に彼女の肌を白く映し出している。

「いや……そんなこと無いけど

「じゃあ、持つて行つてください」

彼女は手にした包みを将也に向つてさらに差し出す。

陽の光を乱反射した真つ白なブラウスは、薄つすらと水色の下着が透けている。

将也は慌てて彼女の胸元から手元の弁当へ視線を僅かにずらした。玲美は目を細めると、閉じたままの口角を持ち上げるように笑つた。

彼もそれを受け取らないわけには行かない雰囲気だったので、思わず包みに手を出す。

「じゃあ、あたし行きますね」

玲美は将也が弁当を受け取つたことに安心したのか

「毒なんで盛つてませんから安心して」

そんな冗談を言いながら、自転車に乗つて走り去つた。

将也は、風にはためく玲美の長い黒髪の後姿を少しの間見つめていた。

3ノ夜【唐突】

「お前、それ今朝貰つたやつだろ
昼休み、信一が声をかけてきた。

佐々木信一は歳も同じで入社もほぼ同期だった。

ほほと言つのは、将也は大学を出て四月に入社したが、信一はその年の九月に中途で入社してきたのだ。

現場が同じ事も多く、社の中でも一番気が合つかもしない。
黒髪を刈り上げたスタイルのサッパリとした将也に対して、少し長めのブラウンに染めた髪を何時もはためかせる信一は明らかに対照的だ。

対照的なのは性格もそうで、将也は比較的消極的かつ慎重に物事を見定めるが、信一は大胆に、そして樂観的に見る癖があった。

「なんだよ、あの女子高生は」「信一が面白そうに訊いてくる。

おそらく今朝の光景を、自室の窓からでも見ていたのだろう。彼は将也の隣の部屋に住んでいる。

「俺にもよくわかんないんだ」「

「はあ？ わかんない娘に弁当貰つたのか？」

「いや、昨日駐車場の前でぶつかつたんだよ」

「へえ、そりやドラマチックだね。じゃあ、彼女がお前に一日惚れか？」「

信一はコンビニ弁当を箸で突きながら笑つた。

「でも……」「

将也は少し浮かない笑みを浮かべて、手作りのダシ巻き卵を一切れ口に入れると

「彼女、何時もコンビニ弁当ばかりじゃ……て言つたんだ」「なんだよ、その通りだろ」

「でも、何時もって、どうして判るんだよ

将也の怪訝そうな視線を受けた信一も、口に運んだ箸が一瞬止まつた。

「それは……こういう場所で働いてればそんなもんだろうな。て思つたんじゃないの？」

「ここで働いてるって、どうして判るんだよ」

「この近くを通りかかったのかも」

「ああ……そうかもな」

将也はそう言いながら、やけに高い鳥の照り焼きを味わっていた。信一は昨日アパートの通路に人形が置いてあつた事を将也には言わなかつた。と言うより、もう忘れていた。

今朝出勤する時にはそれは無くなつていて、もともとさして気に留めていなかつた信一の記憶からも、人形の事は消えていた。

大きなショッピングモールの中は、特定の場所以外窓は無い為、昼休憩の時は外へ出る事がが多い。屋内作業の場合、外の陽差を受けれる事が気分転換になるのだ。

夕方になつて終業の時間が來たが、将也はなかなか自分の持ち場が一段落しなかつた。

一緒に作業していた後輩が図面を見間違えて、コンセントの設置場所を誤つた為、その修正を行つていた。

将也や信一は入社三年目に入り、小さな班を仕切る立場にあつた。その下にはもちろん同年代もいるが、入社一年目、二年目や派遣の連中も多い。

「よし、ここで終わりだな」

将也はコンセントの台座を取り着けて言つた。

「すんません」

「いや、いいさ。俺も何度か間違つた事がある」

将也はそう言つて及川辰彦の肩を叩くと

「俺たちも帰るぜ」

内装工事が進む建物の中は、あちこちが張りぼてのようにまだらにパネルが嵌め込まれ、鉄骨やコンクリート、それに防火シートな

どがここそこで剥きだしになつてゐる。

作業用エレベーター周囲は最初に完成をせたので、その部分だけが別空間のようににぼつかりと周囲の景色から浮いてゐる。

完成期日にまだ間があるので、今のところは定時を過ぎると大半の現場の連中は帰つてゆく為、既に照明もほとんど落とされていた。帰ると言つても、派遣会社関連や外装工事の連中は同じ敷地に立てられたプレハブの簡易宿舎に寝泊りしている為、周辺にひと気がなくなることはない。

一階まで降りた将也と及川は、常夜灯の明かりを頼りに出口へ向つた。

従業員通用口手前には警備室が既に完成しており、警備員が配置されているので、二人は軽く挨拶をして外へ出た。

事務所に戻つた将也はそのままの業務日誌を着けて、帰り支度を始める。

七時を過ぎていた為、日の長くなつたこの時期でも外は暗がりに包まれていた。

敷地内にはあちこちに簡易的な街路灯が設置されて、それが僅かな明かりを作つてゐる。

将也がバックを手にした時、窓の外に人影が見えた。

まだうろつく人影があつてもおかしくない時間帯だ。残業するもいるし、周囲の簡易宿舎から外出する者もいる。

しかし、将也が事務所の戸を開けると、そこには玲美^{れみ}が立つていた。

「わっ、ビックリした……」

将也が思わず身体を硬直させる。

「「」、「ごめんなさい」

「いや、いいけど。どうしたの？」

「まだ仕事してゐのかなって思つて

玲美は少し俯いて言つた。

「今、帰るところだけど」

将也はそう言つて笑うと「うー、よく判つたね」

「うん、何となく当てずっぽう」

彼女はそう言つて、小さな肩をすくめて笑つた。

その仕草が何とも可愛らしくて、将也は思わず頬を紅潮させた。
二十五歳になつた彼が、女子高生と触れ合つ機会なんて普通なら無い事だ。

確かに大学時代はその年代もターゲットに入つていたし、合コンなどもしたが、就職してからは同じ社会人かせいぜい女子大生とか付き合つは無かつた。

昨日も、そして今朝も感じた事だが、女子高生はこんなに初々しかつたか？ もちろんここが地方だからなのかも知れないが、最近の高校生もまんざらではないな……。

そんな事を将也は思つていた。

「あつ、弁当美味かつたよ」

将也はそう言つて、空の弁当箱を玲美に差し出した。

「よかつた。喜んでくれて」

彼女はそう言つて弁当箱を受け取ると

「明日も作つていい？」

「えつ？」

将也は、会つて間もない彼女がどうして自分にそんな好意を抱くのか判らなかつた。と言うより、不思議だつた。

自分は……確かに酷くはないが、一目惚れされるほどの容姿ではないし、こんな女子高生なら周囲にいくらでも同世代のカツコイイ男がいるのではないだろうか。

「いいけど……」

将也にはそれを断る理由が見つからなかつた。

一緒に敷地を歩いて将也の車の所まで来た時、ふと彼は気がついた。

「あれ、キミ何できたの？」

「歩いて」

彼女は平然と言つた。

「歩いて？」

玲美は将也のアパートの近くに住んでいと言つていた。それをここまで歩いてきたのか？ それとも学校帰りの途中か？ いや、学校帰りなら自転車のはずだ。今朝彼女は自転車で学校へ向つたのだから。

将也は何だかよく判らない事ばかりで逆に、彼女にいちいち質問するのを止めた。

「じゃあ、乗つていく？」

「うん」

玲美は笑顔で嬉しそうに頷いた。

4ノ夜【夕食】

「実は今日、両親がいなくて……」

大通りから国道へ出た所で玲美が言った。

「ひとり。て事？」

将也は訊いた。

「ええ。何だか心細くて」

「兄妹はないの？」

「あたし、一人です」

玲美は窓の外を見つめたまま言った。

ぽつぽつと街路灯の明かりが通り過ぎてゆく。

大通りは街路灯も連立しているが、旧道にも思える国道は淋しい光が時折見える程度だった。

将也は運転する視線を、チラリと彼女へ向ける。

小さな街灯の光に微かに映る彼女の寂しげな瞳が気になった。

「一緒に飯でも食べる？」

「いいんですか？」

その言葉を待っていたかのように素早い返事が返った。
ほの暗い車内でも、彼女の笑顔は感じ取れた。

「えつ、あ、ああ。キミさえよければ」

将也は少し戸惑いながら笑みを返す。

「じゃあ、あたし何か作るわ」「えつ？」

思いもかけない言葉だった。

今時の高校生が、一昔前のドラマか漫画のような事を言つとは思
わなかつたからだ。

普通なら、『じゃあ中華がいい』とか、『ファミレスでいい』とか、そんな答が普通だろ？

「いや、そんな面倒な事」

「あたし料理好きだから、平氣」

その言葉を聞いて、将也はあの弁当の美味さを思い出した。

「じゃあそうしてもらうか」

将也はしばらく国道を走った所で、何時も入る通りとは逆向きにハンドルを切つた。

二人は遅くまで開いているスーパーへ買出しに寄つた。鍋もフライパンも無い為、それらも一緒に買つ。

買うものは玲美に全て任せて、将也は買い物力ゴトを乗せたカートを押しているだけだつた。

野菜や肉を選ぶ彼女の横顔は何だかとても嬉しそうだつた。そしてそれは、女子高生を越えた一人の女の横顔でもあつた。

その玲美のシルエットを見て、彼は何故か懐かしい思いに駆られた。それが何故なのかは判らない。

彼女が自分好みの容姿だからなのか……その程度にしか認識しなかつた。

将也の住むアパートは別に女性禁制などの決まりは無かつたが、同じ階は皆同僚だ。

彼の部屋は206号室で角部屋だが、もちろん隣にも同僚がいるわけで、女性を、しかも制服姿の高校生を連れ込む所など見られるわけにはいかない。

そう思うと、自然に階段を上がる足音は忍ぶようになる。

幸いアパートの階段は左右に設置してある為、近いほうを上れば直ぐに部屋がある。

将也はそつと部屋の鍵を開けると、静かにドアを開けて玲美を招きいれる。そして、音立てないようにドアを閉めた。

何時もの癖で直ぐに鍵を閉めようとしたが、何だか如何わしい事を口論でいるように思われるのが嫌で、将也は鍵を閉めずに玄関を上がつた。

「鍵締めないの？」

先に靴を脱いでいた玲美が声をかける。
さすがにしつかり者なのだ。

「えっ、ああ。今締めるよ」
彼は靴を脱いでから、上体を伸ばしてドアロックの摘みに手を伸ばした。

部屋に入る将也を横目に、玲美は台所で買つて来た食材や鍋を出し始める。

四畳半ほどのキッチンには小さな冷蔵庫と電子レンジ、そして洗濯機がある。

流しもコンパクトで電気コンロが一つとシンク。その間に少しだけ、三十センチほどの調理スペースが在る。

テーブルが無いので、冷蔵庫に入れるものはそのまま入れ、床に置いても大丈夫な物は足元に並べていた。

彼女は何だかやけに慣れた手つきで鼻歌混じりに身体を動かしていた。

「何か飲む？」

途中で玲美が将也に声をかけた。

「あ、ああ。お茶あつたよね」

玲美はグラスとペットボトルのウーロン茶を部屋へ運んでテーブルに置いた。

「何にもないのね」

初めてリビング兼寝室を見た彼女が、辺りを見回して言った。

右側の出窓の脇に備え付けのベッド、その反対側には同じく備え付けのテレビ台と液晶テレビ。

テレビ台の中には衛星チューナーとDVDデッキが収まっていた。
そして部屋の中央にローテーブル。ざつと見えるのはこれだけだった。

もちろん、クローゼットの中には着替えやその他の荷物が押し込んであるが。

「長期と言つても出張だからね

「ふうん。そうかあ」

彼女は、ある意味そつけない口調で応えると再びキッチンへ戻つた。

将也はそれを田で追つた。

まるで、夢の中の風景でも見てこりようだつた。

時折うなされる悪夢の変わりに、現実でいい夢を見させてくれているんだろう……。

制服姿で台所に立つ女性の後姿を眺めながら、将也はタバコに火をつけた。

5ノ夜【密着】

濁つた景色の中で何かが動いていた。
どうして視界が濁っているのか、動いているそれが何なのか判らない。

気泡がぶくぶくと出ていた。

それを見て、夢の中の将也は（ああ、またあれか）そう思った。
水の中で何かがうごめいて、僅かな泡を出す。それ以外何もない。
水は濁つていて視界が悪い為、はっきりとした物は何も見えず、
ただ自分も水中にいるのだと認識する。

それでも息は苦しくない。

不思議な浮遊感に身体は包まれて、重力を感じない。
やがて景色は水面に変わる。

自分が水から上がったというよりも、突然目の前が水面に変わること
のだ。

そこが河なのか海なのかは判らない。
相変わらず自分の身体には重力を感じない。
もしかしたら今の自分は実体が無いのではないかと思つ。何故なら自分の手足が見えないからだ。

視界一杯に広がる水面が見えるだけだ。

視線はなぜか動かせない。

水面に小波さざなみが立つて、とても穏やかな情景だ。

しかし、それを見た将也の記憶の奥底は、ピンチと一瞬跳ね上がる。

それが何故なのか彼には判らなかつた。

その水面から再び水中に潜るとそこには玲美れみがいた。

濁つた水の中でも、彼女の白い肌が光つている。

出窓から月明かりが注いでいた。

その明かりに照らされながら将也は目を開けた。

カーテンを閉め忘れていた為、もちろんレースのカーテンは閉まつているが……明るい満月がベッドを煌々と照らしていたのだ。

将也は眩しかったわけでもないのに、妙にサッパリと目が覚めた。今しがた見た夢は、彼が時折見る不思議な夢だ。

何時からかは判らないが、だいぶ昔から見てている気がする。

未だに意味不明の夢だが、何か心に変化が起きると見るような気もする。かと云って、その前に何時見たのかは覚えていないが……。将也はいつたい今が何時頃なのか検討がつかず、床に置いている目覚し時計を見ようとそれに手を伸ばす為に身体を伸ばして……軽く驚愕した。

……うわっ。

「」この中で悲鳴をあげる。

自分の身体の横にはもう一つ身体があつたからだ。

しなやかで、白い。

それが誰なのか、将也は一瞬で思い出した。

「俺、高校生としちゃったのか。

夕食の後片付けは済んでいたが、テーブルには缶ビールが数本とカクテル缶チコーサーが一本ある。

カクテルは仕事帰りに買い物へ寄ったスーパーで、玲美が飲んでみたいと言つて買ったものだ。

酔つた勢い？ 将也は冴え渡る日とは裏腹に露の掛かつたような記憶を辿った。

夢うつつ……玲美の身体は穂のかにリンクのよつなミントのような甘い香りがした。

成り行きはごく自然だった。

しかし高校生を……しかも制服を脱がして抱いてしまつとは……やっぱり自分は酔つていたのか。

いくら恋愛自由の会社でも、出張先で未成年と……これは完全な淫行になる。

それでも将也は安堵の吐息で眠る彼女を揺すり起こす事には気が引けた。

彼が自分の身体を少しずらすと、影が動いて彼女の白い寝顔の頬を月影が照らし出した。

その白い横顔は、やつぱり何処かで見覚えがあつた。

しかし、その記憶を追ううとしても、頭の中は何かをすり抜けるのみに何の手ごたえも感じない。

将也は考えるのを直ぐに止めると思わず彼女の頬にキスをして、出窓のカーテンを開めてから再び眠りに着いた。

田覚まし時計のけたたましい音で田が覚めた。

夜中にあんなにあつさつと田が覚めたのに、肝心の今は田が渋くて開けられない。

部屋の中には朝の陽差がしこたま降り注いで、その眩しさのせいもあるのだろう。将也は薄田を開けてとにかく起き上がって田覚ましを止める。

上半身は裸だった。トランクス一枚履いた状態で部屋の真ん中に立ち竦んでいた。

ベランダへ通じる窓が少しだけ開けられて、網戸を通り抜けた風がレースのカーテンをゆっくりと静かに揺らしていた。

夢現……まだ半分眠った頭で思考を巡らす。

そうだ、昨日は……将也は部屋の中に玲美の気配を探した。

小さな部屋である。

ざつと見れば直ぐに判る事だ。しかしバスにもトイレにも彼女の姿はない。

……夢だったのか？ 彼はそう思いながら床にペタリと腰掛けるが、湯沸ポットの横には長い黒髪がSの字を描いて落ちていた。

将也はそれを拾い上げるとマジマジと見つめる。

確かに彼女はここへ来た。

そして……

彼はベッドを振り返った。

シワの入ったシーツの上にも、長い黒髪が落ちている。それは朝の陽差を浴びて、一筋の光を放っていた。

将也はそれ以外にも部屋の中に彼女のいた形跡を探す。玲美と過ごした記憶が、それだけ半信半疑だつたのだ。

記憶の中で夢と現実が交錯する。そんな目覚めの朝は初めてだつた。

再びキッチンをよく見ると、洗いざらしの鍋が置いてあった。シンクの下の戸棚にはフライパンも入っている。

それらは確かに昨夜玲美と一緒にスーパーで買ったものだ。

……やっぱり彼女がここに来たのは間違いない。そして酒を飲んで高校生の彼女と身体を交えてしまった。

その記憶は曖昧にしか無いものの、彼女の白く冷たい肌が彼の脳裏に蘇えった。

……学校があるから、朝早く帰ったのだろう。しかしこんなに朝早く？

いや、きっと仕度もあるし親が心配するといけないから、一度家に帰つたのだ。そうに違いない。

そう思いながら将也は電子レンジの上に視線を止めた。紅いバンダナに包まれた四角い包み。

それが弁当だと直ぐに判つた。

彼女はここで今日の分の弁当を作つていつたのだ。

玲美がどうしてそんなに自分になつき、これほど尽くしてくれるのはかは判らないが、独り身の将也にとつてはありがたいことだ。

ただ、彼女の事は同僚には知られないようにしようと思つた。

相手が未成年であるが為の危機感みたいなものは、どうしても拭えなかつた。

そうしている内に時計は七時になろうとしていた為、彼は急いで

シャワーを浴びてアパートを出た。

その時、クローゼットの中で微かに何かの気配がした事に、彼は
まったく気づく事は無かった。

6ノ夜【透ける】

梅雨らしからぬ晴天が連日続いていた。

ショッピングモール館内のエアコンは急ピッチで備え付けが完了し、配管が剥きだしとは言え、きちんと可動していた。

ただ、全館にいきわたっているわけではなく、いやエアコン自体は全館備え付けが完了しているものの、それらを全て可動させる事は禁じられているのだ。

もちろん工事費予算の関係だろう。

その為、メイン作業場以外はエアコンが作動しておらず、蒸し風呂のような状態になる。

そんな作業箇所があちこちにあった。

外は陽差が降り注いでいるものの、周辺に残る水田の風が流れ込むのか、心地よい風が吹いて何時も清々しかった。

下手に事務所で扇風機にあたるよりずっとましなのだ。東北の夏は都心に比べれば天国だった。

明日から七月だと呟つのに、異常な湿度もなく、夜は未だにエアコンは要らない。

将也はその日の仕事を終えて業務日誌を書き終えると、不意に玲美の事を思い出した。

今朝まで、いや昨日の夜ずっと一緒にいたのに、もう会いたくなつた。

優しい笑みを浮かべる涼しげな玲美の瞳は、遠い単身の地で将也にささやかな安らぎを与えてくれた。

それは、彼が今まで知り合つた女性たちとはやはり何処か違つていた。

関東の娘は気さくで明るい女性が多い。

打ち解けるのも早いが飽きられるのも早い。もちろん、飽きられるのは将也の方だ。

玲美は涼しげな眼差しとは裏腹に、何処か暖かさがある。一緒にいると静かな安らぎを感じるのだ。

「将也、今日みんなで呑みに行くけどどう?」

ロツカーから荷物を取り出しながら信一が言った。
彼も他で班長をしている身だが、信一の場合、夕方の小休憩の時等に日誌をほとんど書いてしまう。

何かあれば付け加えるようだが、帰りがけはほとんど提出するだけになつていてるのだ。

「ああ、少しなら付き合つぜ」

断るわけにもいかなかつた。

週末はみんな、飲み屋かカラオケに行く事が多い。

それ以外にたいした娯楽もない。

少し離れた街には繁華街があつて風俗もあるが、わざわざそこまで遠征するのはよほどの好きモノ連中だけだ。

そんな週末の憩いを断れば、何かあるのではと勘ぐられるような気がした。

本当はそんな事はないのだろうが、玲美との事は出来るだけ伏せておきたい気持ちが強かつた。

将也は鞄を持つと、事務所の片隅でタバコを吸っていた信一に声をかけて一緒に外へ出た。

* * *

日曜の晩、将也は小学校へ来ていた。自分が四年生まで通った学校だ。

彼がいた時は濃い灰色の、いかにも古びれた二階建ての鉄筋コンクリート校舎で、あちこちにひび割れが出来ていた。

しかし現在の建て替えられた校舎は、真っ白な4階建てになつて

いた。

校庭に足を踏み入れても、そこは確かに自分が走り回った場所のはずなのに懐かしさは込み上げて来なかつた。

校庭と校舎の間には赤松の木が何本か植えられて職員室の窓を隠していた。

校庭のふちに沿う形で鉄棒やうんていが並んでいる。

一番低い鉄棒はもはや将也の腰ほどの高さしかなかつた。

閑散とした校庭の真ん中を歩いて校舎に近づいた。ひと氣のない真新しい建物が彼を見下ろしているだけで、将也の想い出はそこには無かつた。

校庭の周辺を見渡して景色を再確認するが、四方共に記憶の中の景色とは違つていた。

上空には晴れ渡る青空が続いている。

それだけは、何時か見たものと同じ気がした。

「アパートは向こうだな」

呟きながら校庭の東側を見つめた。

見知らぬ家並みが続いている。

「やつぱり俺の住んでいた方角だ」

将也はそう言いながら、一八〇度向きを変えると、プールの向こうの墓地に視線を移した。

この学校プールの横には古い墓地が在るのだ。

「さすがに墓地は動かせなかつたんだな」

そろそろ帰ろうと校門を振り向いた時、そこに人影が見えた。白いブラウスに紺色のスカート。

それが玲美だと言う事は直ぐに判つた。

彼は校門に近づきながら片手を上げると微笑んで見せた。

一昨日の記憶が蘇えつて、年甲斐も無く思わずはにかんだ。

「よくここが判つたね」

「うん。今、たまたま通りかかったの」

玲美はそう言って微笑んだ。

陽差を浴びて、顔の白さが際立っていた。

「制服で何処かへ？」

「部活の帰りよ」

部活という言葉は、妙に懐かしい響きだった。

「でも、歩いて？」

自転車は何処にも見当たらない。

家の遠い友達が自転車壊れちゃって、貸してあげたの

「そう」

将也はそう言つて一息間を置くと「乗つてく? 送るよ。暇だか

「う

「じゃあ、何処か遊びに行きたい

「いいけど、制服のまま?」

「ダメ? 援交みたい?」

彼女は目を細めて笑う。

「いや、別にいいけど」

そう言つて将也も笑いながら、彼女を車に促した。

車の中は地獄のように暑くなつていて、エンジンをかけた将也は急いでエアコンのクーラーを最強にした。

「熱いなあ」

そう言つて玲美を見た時、将也は思わず瞬きを繰り返した。暑さに目を閉じた玲美の身体が、ほんの一瞬透けて見えたのだ。洋服が透けて見えたわけではない。身体の全てが透き通つて、助手席のドアやシート地が見えた気がしたのだ。

しかし彼が数回目の瞬きをした時に、それは収まっていた。

少し顎を上げて瞼を閉じた玲美は、将也の視線に気付いたのか

「なに?」

そう言つて、目を開けて振り返った。

「い、いや。何処行きたい?」

遠くから、汐風の香りがした。

7ノ夜【消えた人形】

国道をしばらく走つて、産業道路に出た。

三車線の広い道路が続いていた。

周囲は工場や運送会社の大きな倉庫が立ち並んで交通量は少なく、前後に離れて何台かの車が走っているだけだった。

対向車も時折すれ違う程度だ。

大きな材木置き場を過ぎて丁字路の先には海が見えた。
そこを左折して海岸沿いを走る。

「へえ、海が意外と近いんだな。気付かなかつた」

「それでも、自転車じゃあななかなか来れないから」

玲美は助手席の窓を全快にして吹き込む風を頬に当て、気持ちよさそうに目を細めた。

風を受けた長い黒髪がうねるようにならめた。

その光景に一瞬将也の鼓動は跳ね上がった。

長い黒髪が大きくうねる光景を見て、夢の中の少女を思い出しだのだ。しかし、ここ数日彼はあの悪夢を見ていない。

生活環境に慣れたせいだろうと思っていた。やっぱり不慣れな場所での生活がなんらかの影響を及ぼして奇妙な夢を見させていたのだと思った。

それでも将也は、運転する視線の合間にぬつて、何度も玲美を盗み見た。

動きを止めている彼女の姿は、まるで人形のようだつた。

そのまま一度と動かないのでは……そんな錯覚さえ沸き起ころるが、瞬きする様を見てホツとする。

「あ、そこ右に曲がつて。駐車場があるわ」

彼女にそう言われて、将也は慌てて、それでも急にならないように車を減速させると、彼女の言つとおりに駐車場へ車を入れた。

駐車場は意外と広く、家族連れっぽい車が数台停まっていた。

駐車場から直ぐの堤防を上ると直ぐに砂浜が広がって、周辺には家族連れや犬を散歩させる姿がちらほら見えた。

遠くの防波堤には釣り人の姿も見える。

湿った風を浴びて、玲美の黒髪は踊るようにはためいていた。飼い主とボール遊びをしていた犬が、ちょうど砂浜から上がつて来る所だった。

温和そうなラブラドールが玲美の近くに来た時、彼女を見上げて急に唸りを上げた。

「こら！」

飼い主の女性が慌ててそれを制するが、ラブラドールは身体の重心を後ろに集めて、足を踏ん張りながら鋭い牙を露に唸り続けた。

犬の行動に戸惑っている飼い主を見て将也は

「行こう」

そう言つて、自分達がその場から離れるように玲美を促した。「あんな大人しそうなのに」

少し離れてから将也が言った。

「あたし、犬とは愛称が悪いみたいなの」

玲美はそう言って長い髪をかき上げた。

そんな人もいるだろうと将也は気にも留めなかつた。

一度後を振り返えると、玲美が遠ざかつた為か、さつきの犬は大人しく飼い主と共に駐車場に降り立つていた。

二人は防波堤まで歩いて、再び駐車場へ戻つた。

テトラポットに当たつて砕けた波が思いの外高く上がり風に煽られるながら堤防に降り注ぐ為、長居は出来なかつた。帰りの砂浜で将也は何気なく足元に目を止めた。

何か不自然さを感じたのだ。

強い陽差できれいとは言いかたい砂浜には、自分の濃い影が落ちていた。

しかし隣にいる玲美の足元には何も無い。それはあまりにも不自然なのだ。

将也は思わず玲美の顔に視線を移した。

「影が無いぞ……どうのことだ？」

「れ、玲美？」

「ん？」

遠くの水平線を見つめていた彼女が振り返った。
確かに彼女はこの場所に実在している。

将也は彼女が自分の声に反応して振り返っただけで安心した。
自分の隣にいる彼女がただの妄想ではないかと一瞬思つてしまつたからだ。だから影が無いのかと思つたのだ。

しかし、再び将也が玲美の足元を見ると、確かに黒い影が落ちていた。

「どうしたの？」

はためく髪を手で制するようにして、玲美は将也を見つめた。

「いや、ああ……お腹空かない？」

「うん。空いた」

彼女の笑顔に将也は、さつきのはきつと見間違いなのだと思った。
それ以外考えようが無かつたから。

しばらく晴れ間が続き、連日の暑さの中将也も少々ばて気味だつたが、ほとんど毎晩玲美が食事を作りに来てくれる為、家に帰ると心の安らぎがあつた。

こんな出張なら何時までもいたつていい。

正直そんな気持ちになるほど、玲美といふ時間は心身ともに心地

よいものだつた。

遠い昔から知つてゐる誰かの温もりに似ている。

その日は梅雨明け以来久しぶりにまとまつた雨が、乾いた大地を潤していた。

将也は何時ものように仕事にてて、畳には玲美の弁当を食べる。彼女は自宅でそれを作つてくる事もあれば、将也の部屋で作る事もある。

もちろん、彼の部屋で弁当を作る前夜は、将也のベッドで玲美は眠る。

「おう、将也。この書類もう一部必要になつてや、「コンビニか何処かで」「ペーとつて来てくれ

雨の為プレハブの事務所で弁当を食べていた将也に声をかけたのは現場主任の出雲元治。

同年代の間ではガンさんと呼ばれてゐるが、もちろん部下である将也たちはそんな呼び方はしない。

「コンビニですか？ 及川とかじゃダメですか？」

「きちんととれるか、なんだか心配でよ

出雲は苦笑しながらお茶を啜つた。

新人の及川は自分では仕事が出来る男と思い込んでゐるが、実は何もかもが雑で、結局後処理を周りの人間がやらねばならなくなるような、いわゆる曲者だつた。

「判りましたよ」

将也はそう言って、出雲から茶封筒を受け取つた。

彼は弁当を食べ終わると、大通りを挟んだ場所にあるコンビニへ向つた。

みんながよく弁当を買つたりしている場所だ。

将也がコンビニのドアを開けると、レジのところに深い紫色の袋を纏つた男の姿が目に飛び込んできた。

禿げではないが、短く丸めた頭はお坊さんだと直ぐに判つた。

コンビニ内に坊さんのいる風景は、妙にしつくり来ないものだと

思いながら、彼は「コピー機に小銭を入れた。

一枚一枚位置を確認しながら「コピーをとり始めると、コンビニのオーナーらしき年配者と和尚の会話が耳に入つて来た。

「人形が？」

「そりなんだよね。一体見当たらないんだ」

「供養を引き受けた人形ですか？」

「ああ、それはいわば無縁仏。持ち主の判らぬ人形たちの中にあつたんだが、けつこう年数が経つていてね。十年以上経つたものは別の棚に並べてるんだ。それが先週急に姿を消してね」

「何處かに落ちてるんじゃないですか？」

「私もそう思つて探したよ。手前の下の方に置いてあつたから、前日は確かにそこに在つたんだ」

「じゃあ、盗まれたんですかね」

「それならまだいいんだけどね……」

「コンビニオーナーは訝しげに和尚の顔を見て

「どういう事です？」

「最近は無いが、昔は捨てられた人形が持ち主の所へ帰ろうと行方をくらます事もしばしばあつたらしい」

「人形が持ち主を探しに出かけるんですか？」

「コンビニオーナーは思わず失笑した。

和尚も穏やかに笑つたが、瞳は笑つていなかつた。

8ノ夜【触れ合ひ記憶】

「人形が持ち主を探しに行くだつて？」

将也はコンビニを出て傘をさしてから、再び店内を振り返つた。
和尚はさつき店を出て行き、コンビニオーナーらしき男は淡々と仕事をこなしていた。

歩道の先を見ると、さつき出て行つた和尚が路地に入る所だつた。
将也は店内に引き返すと

「すいません。さつきの和尚さんは、何処の？」

別にたいした意味は無かつた。話のタネにちょっと興味を引かれただけだつた。

「ああ、この裏の通りを少し行つた住宅街の先にお寺があつてね」
男はそう言つてから少し笑つて

「変わり者の和尚でね、人形供養なんかもやつてるんだ」

「人形の供養なんて意味あるんですか？」

「意味ある人にとっては、あるんだろう。ほら、人形には魂が宿ると
言われるし、それを信じている人もいるから」

将也は引き返しついでに缶コーヒーをひとつ買って店を出た。
止め処なく降る雨は強まるわけではなかつたが、弱まる気配もな
かつた。

「こんなに頻繁にここに来て、ご両親は心配しないのかい？」

将也は相変わらず小さな台所に立つ玲美に向つて言つた。

「うちは共働きだから、あたしには完全放任主義なの」

「へえ」

将也はそう言つて冷えた麦茶を口にする。

「家は何処に？」

「えつ？」

玲美は包丁を持つ手を止めて振り返った。

将也は少しだけ疑問に思っていた。

彼女は決して家まで送らせない。

確かに将也のアパートからは歩いても直ぐの場所らしいが、玲美の家が何処に在るのか、その正確な場所を将也は知らないままなのだ。

「すぐそこよ」

玲美はそう言って再びまな板の上にあるキャベツに視線を向けた。

「そこって？」

「そこって言つたら、すぐそこ」

彼女はキャベツを切る手を止めずに声だけを返した。

「ふううん」

将也はそう答ながらテレビに視線を移した。

東京ならこんな事もあるだろ？

しかし、ここは世間の狭い地方の小さな町だ。

高校生の彼女がここに出入りし続けていいものだろ？ 将也の中では小さな葛藤が沸き起こっていた。

彼女は学校が試験休みに入ると毎日ここへやつて来て、将也が仕事を行つた後も部屋の掃除をしたりして過ごしている。

日中には部活を行つていると言つが、夜は再びここへ来て夕飯を作ってくれる。

そして、三日にいつぺんは泊まつてゆく。

確かに退屈な長期出張にはありがたい彼女の存在だが、この先の事を考えると暗たんとした思いがこみ上げるのだ。

高校生の彼女を浦安に連れて帰れるわけも無く、出張が終われば玲美との終わりもやつてくるという事だ。

彼女はそれが判つてゐるのだろうか。

もちろん、出張の予定は十一月までだからまだまだ先だが、確實

に終わりはぐるのだ。

ジュワッといつ、とんかつを揚げる音がキッチンから聞こえてきた。

その夜、久しぶりにあの夢を見た。

黒髪少女が出てくるあの夢だ。

相変わらず白く抜けた顔の中に存在する田鼻ははつきりせず、

朧気に彼を見つめる。

田の輪郭も白田と黒田もはつきりしないのに、何故か自分を見つめている事はわかる。

それが何故なのかは判らないが、少女は確かに将也を真っ直ぐに見つめていた。

しかし、今回はあのセリフがない。

「あたしを捨てた」という恨めしいセリフがなかつた。

ただ一心に将也を見つめる田が、背景の無い世界で朧気に輝いていた。

穏やかな風に揺らめく長い黒髪も、激しく舞つたりはしない。

肩から背後に流れた髪は、サラサラと彼女の身体の陰から見え隠

れしていた。

「キミは誰だ？ 誰かを探しているのか？」

将也は思わず自分から問い合わせた。

しかし、少女は何も応えなかつた。

ただ静かに将也に近づいてくると、唇を重ねた。

将也は動けないまま、彼女に唇を塞がれた。

その距離でも少女の田鼻は朧気なままで、その輪郭、特徴ははつきりしない。

ただ、重ねた唇の感触は何処かで確かに感じた覚えのあるものだ

つた。

それも、そう遠くない記憶だと思った。

将也は突然目を見開いた。

そこにはほの暗い天井が在るだけだった。

カーテンの隙間から、朝ぼらけの光が薄つすらと入り込んでいる。以前の時みたいに飛び起きるような夢ではなかつたが、何故か全身は汗で濡れていた。

将也是今感じた夢の少女の唇の感触を思い出そうとしたが、どうしても思い出せなかつた。

9ノ夜【ふたり】（前書き）

これまでロードした恐怖だけの、あからさまなホラーではあります
ん。

どちらかと云えば、ロマンティックホラー？ かもしれません。

普通のジャンルと同じように、緩い気持ちで読んでいただければ幸
いです。

9ノ夜【ふたり】

その週の土曜日、将也が仕事に向う為に家を出ると、駐車場の前で玲美と会った。

「よかつた、今から？」

「ああ」

「これ、今日のお弁当ね」

玲美はそう言つて、バンダナの包みを差し出した。
将也は少し照れながらそれを受け取つた。

どうして今更照れるのかと言つと、玲美の隣にはもう一人少女がいたからだ。

この状況を客観的に見られるのは、やはり何処か恥ずかしさを感じる。

それは歳の差だったり、単に弁当を作つてもう一つという行為だったり。

「ああ、サンキュウ」

将也はそう言いながらはにかむと、玲美の横に視線を移した。

「彼女は友達の雪乃ちゃん」

玲美に紹介された雪乃是

「はじめまして」

そう言つて、白い歯を見せて笑つた。

玲美とは正反対の、耳がようやく隠れるほど短い髪が印象的だった。

しかも、雪乃という名の割には肌はほんのり小麦色で、寧ろ玲美の方がその名にあつている印象だ。

「同じ学校の？」

玲美と雪乃是同じ制服を着ていた為、当たり前の事だったが将やは思わず確認した。

「ええ、部活も一緒なんです」

「部活は何を？」

将也の問いかけに、雪乃是玲美を見た。

「吹奏楽部よ。言つてなかつたつけ？」

玲美が応えた。

「あれ？ 前に聞いたつけか？」

「もう」

玲美は少し頬っぺたを膨らまして笑つた。

友達と一緒に彼女はまさしく無邪気な女子学生そのものだった。

「仕事でしょ？」

「あ、そうだ」

将也是玲美に促されて、駐車場に入つて車に乗り込んだ。

玲美は彼に手を振り、雪乃是小さな会釈をして一人は自転車で去つていった。

これから部活なのか、今が帰りなのか訊かなかつたが、去つた方角からするとこれから部活なのだろうと思つた。

と言う事は、雪乃という娘は玲美の家から来たのか？

それが、将也には何となく安心する要因になつた。

何処に住んでいるかはつきりしない玲美だが、友達が迎えに来ているという事は、この近所に確かに住んでいるのだろう。

そう思えたからだ。

しかし昼休み、信一に付き合つてコンビニに向つた将也是ふと気が付いた事があった。

この大通りの歩道はけつこうな数の高校生が通る。

試験休みに入つてからはその量は減つたが、それでもやっぱり部活などがあるのだろう、時折集団が自転車で通り過ぎる。

紺色のズボン、女子は同じ色のスカートに白いブラウス。そしてワインレッドのネクタイをしていた。

もうひとつは女子高だろうか、グレーのチェック地のプリーツスカートに水色のブラウスを着ている。

その他にも時々、極たまに見かけるグレーのスカートに白いブラウスの生徒もいる。

が、玲美と同じ制服をいつこうに見かけないのだ。

紺色のプリーツスカートに白いブラウスでリボンもネクタイもない学生は、彼女、いや玲美と雪乃以外には未だに見覚えが無い。

将也は思わず歩道を通り過ぎる学生たちを目で追つた。

「おい、何だよ。お前は何時も女子高生が一緒だろ」

信一は冗談まじりでそう言つて将也の背中を叩いた。

「いや、彼女何処の学校なんだろ……」

「はあ？」

「学校だよ。玲美の制服は他に見かけないんだ」

「ふうひん」

信一はそう言つて、将也の視線の先にある通り過ぎた学生の背中を見つめると

「そういえば、あの娘が着てるようなシンプルな制服は今時少ないよな」

信一は将也の隣に住んでるので、玲美が将也の部屋に出入りしている事を知つている。

もしかしたら、夜に体を交わす声が僅かにでも聞こえる事があるかもしねれない。

もちろん、将也はそれ自体に気を使つてゐるつもりだが。

そして、とりあえず信一はそれを誰にも話していらない。

他の同僚も、玲美の姿を見かけているとは思うが、将也の部屋に出入りしている事までは知らないのだ。

「どつか、離れた学校なんじゃないの？」

「自転車でか？」

「駅まで自転車かも」

「でも、前に学校の友達に自転車を貸したからって、歩いて帰つて

来てたぞ」

「じゃあ、方向が逆の学校なんだろ」

信一はそう言って、先にコンビニへ入つて行つた。

充分にありえる事だから、その時は将也も納得してそれ以上深くは考えなかつた。

夕方に図面のコピーをとりに再び最寄のコンビニへ行つた将也是、オーナーらしき店員の男を再び見かけた。

「あの和尚も最近ボケてきたのかね。人形がまたいなくなつたって言つてたよ」

「人形つて、あの供養を請け負つている人形ですか？」

「この前も一体いなくなつたって言つてさ」

店員の男は、パートの主婦らしき女性店員と弁当の入れ替えをしながらそんな会話をしていた。

「前にも無くしたんですか？」

「和尚は勝手にいなくなつたつて言つてるけどね、何処かに置き忘れたんだろう。そしたら、今朝また一体いなくなつてたつて。さつき来た時ぼやいてたよ」

「やばいですね、あの和尚も。何か、ある意味怖いですよ」

「そうだよな。自分で他の場所に置いたくせに、人形が勝手に歩いて移動する。とか言いそうだもんな」

男はそう言いながら、お客の手前声を押し殺して笑つた。

女性店員も同じく、声を潜めて肩を震わせていた。

10ノ夜【疑問】

「おかしい……こんな事はわしがここを継いでから初めての事だ」青雲寺の和尚は境内に隣接した蔵で、ただ首を傾げていた。

境内の奥には人形を供養する為の棚が設けられている。しかしここは小さな場所で、古い物は蔵の奥へ入れられる。

持ち主から直接依頼を受けた物は供養の後保管されて一年に一度火葬されるが、持ち主不明のものは別の棚に半永久的に保管されている。

蔵の奥にはその為の大きな棚が設けて、一年以上経っているもの、五年以上経っているもの、そして十年以上……それぞれに分かれて置かれていた。

人形にも個別に札が着けられて、何年に持ち込まれたものかが記されている。

先代の父の前、祖父がここで和尚をやっていた頃は、よく供養中の人形が無くなつたそうだ。

持ち主を恋しがり蔵からすり泣く声が聞こえたりもしたと、和尚は小さい頃祖父に聞いたことがある。

現和尚は人形がすすり泣いたり、勝手にいなくなつたりなどするはずが無いと思っていた。

もちろん、供養については真剣に行って來たが……
しかし、一週間に突然一体の人形が消えた。

真つ白な肌に長い黒髪をした純日本的な容姿をしているが、洋風造りの古い人形だった。

それがある日突然無くなつていた。

蔵の扉は鍵を掛けているので誰かが持つていく事もないし、犬猫が入れる隙間もない。

そして昨日、一体目がなくなつた。

それは境内の影に設けた比較的新しい人形を供養して祭つておく

棚からだつた。

有名玩具メーカーが造つた黒いショートヘアのその人形はそう古いものではないが、結婚する女性が捨てるのも忍びないと今年の春に持ち込んだものだ。

消えた二体には全く関連性も無く、和尚は首を傾げるばかりだった。

「よからぬ事が起きなければよいが……」

* * *

将也がアパートに帰ると、玲美れみが来ていた。

もちろん彼女は合鍵を持っている。

日中に洗濯をしたのだろう、乾いた洗濯物をたたむ彼女の姿と、陽差を浴びた洗濯洗剤の香りが部屋の中にあつた。

「お帰りなさい」

そう言つて微笑む彼女の姿は最近珍しくない。

将也が帰宅した後に来る場合もあるが、先に彼女が部屋にいる事も少なくは無いのだ。

とにかく夕方五時から七時頃は同僚の出入りがあるから気をつけてくれと、玲美には頼んである。

だから彼女はその前かその後にくるのだ。

将也と入れ替わるように玲美がキッチンへ行く。

彼女は学校が休みに入つても制服姿が多い。

それは部活がある為だとthoughtっていた。

時折私服姿を見るが、白いブラウスにベージュか紺色のスカートであまり見栄えはかわらない。

「なあ、玲美」

「なに?」

「玲美の高校って何処にあるの?」

「なんで?」

彼女はクリームシチューの鍋を温めながら、それをお玉でかき混ぜていた。

「いや……何処の学校に通つてるのかと思つて

「最近質問ばっかりなのね」

彼女は将也を振り返らずに言つた。

「いや、でもキミの事を俺は知らなすぎるよ

「そんなこと無いじゃん。あたしの全てを知つてゐるくせに

そう言つて振り返つた玲美は、目を細めて笑つた。

将也は、何故かそれ以上訊く事ができなかつた。

翌日は仕事が休みだつた為、玲美^{れみ}は将也の部屋に泊まつた。

土曜日の夜は深夜からかなりの時間を使って二人は体を交わす。

唇を重ねた瞬間、その感触を何処かで感じた記憶が蘇えつた。

もちろん、彼女とは今まで何度もキスを交わしているがそんな記憶ではない。

何か別の場所で感じた同じ感触。将也はそう思つた。

しかしどうしてもそれを思い出せない。

そんな思考は直ぐに打ち消されるほど、玲美の身体は将也を魅了した。

朝起きると玲美の姿は無かつた。よくある事だ。

どれだけ濃密に身体を交わした後でも、それが幻だつたのではな
いかと思わせるほど、彼女は翌朝忽然と姿を消している事がある。

しかし、シワの多いシーツや枕元に落ちた長い髪の毛を見て、将
也はホッと息をつくのだ。

玲美との触れあいは夢や幻ではないと認識するのだ。

思考が微かに混乱してしまつほど彼女は謎めいて、透き通るような白い肌は幻想的だ。

あんなに全身が白い女性を将也は見た事が無い。

例えばかりなり白い肌の持ち主でも、脇の下や太ももの付け根など常に影になる部分は少しでもメラニン色素が蓄積する。だから僅かに肌は黒ずんでいるのだ。

それなのに、玲美はまるで作り物の身体のようほどの部分も均一に白いのだ。

その白さは肌色と言つには白すぎる。

アイボリー・ホワイト、または生成と言つた方が相応しいだろう。将也はふと昨晩の記憶を蘇えらせて自分の唇を指先で触れた。

……あの感触は……何処で感じたんだ。

彼は、玲美とのキスの感触が何処かで味わったものだと思い出していた。しかしそれが何処でなのか、やはり思い出せなかつた。

その後将也はシャワーを浴びる為にクローゼットを開けて手前の棚からタオルを取り出した。

閉めたクローゼットの奥では何かが動く音がしたが、浴室へ向う彼の耳には届かなかつた。

11ノ夜【家並】

部屋のチャイムが鳴った。

将也は玄関へ出てドアに付いているマジックアイを覗く。自分で鍵を開けて入って来ないのでから玲美ではないと判つた。

フィッシュユアイで歪んだ信一の顔が直ぐ傍に見えた。

「ビデオ屋行こうぜ。俺、返す物あるんだ」

ドアを開けた将也に彼が言った。

今時レンタルするのはDVDなのに、言い易さで未だにビデオ屋と言つてしまふ。

これが大手チーン店なら店名で言つたが、そのチーン店はだいぶ離れた場所にある為、こここの住人は近くに在る小さな看板のいかにも個人店らしいレンタルショップを利用している。

将也は肩をすくめると

「ちょっと待つてろよ。今着替えるから

「何だよ、早朝までヤツテたのか？」

信一はそう言って笑つた。

「そんなヤルかよ」

玄関でタバコに火をつけた信一に向かつて、将也はジーンズを履きながら応えた。

「ずいぶん早い時間に彼女出て行つたな」

信一の言葉に将也はベルトを締める手を止めて

「お前、彼女が何時頃帰つたか知つてるのか？」

「ああ、ちょうど便所に起きて、そん時にこのドアが閉まる音がしたよ」

信一はタバコの煙を吐きながら

「あれ、お前じゃないだろ」

「何時ごろだった？」

「何時つて……6時頃か」

信一は再び口から煙を吐き出すと

「なんだよ。お前、知らないうちに彼女帰ったのか？」

「ああ、けつこう多いんだ」

将也はそう言いながら玄関まで来て、靴を履いた。

レンタル屋は小学校の方角に在った。将也の車でそこへ向っていた。

「なんだ彼女、ヤッタら帰つちまうのか。普通逆だろ
車の窓を開けながら、信一が再びタバコを咥えた。

「彼女、謎が多いんだよなあ」

将也は運転する視線のまま咳くようと言つた。

「なんだよ、学校の事気にしてんのか？ 直接訊けばいいじゃん
「訊いてみたんだよ」

「何処の学校だつて？」

「はぐらかされた」

「はあ？」

信一はシートから身体を浮かす勢いで声を上げた。

「何でそんな事はぐらかすんだ？」

「俺が知るか」

将也は相変わらず、運転する視線を動かさなかつた。

小学校を過ぎて交差点を右に入ると通りの左側にレンタル屋があつた。

どう見ても、元はコンビニだったという建物だつた。

将也も何度か来ているが、玲美が部屋に来るようになつてからはめつきり足を運んでいない。

そして、その先には大きなお寺の黒い瓦が、民家の屋根越しに見えていた。

駐車場に車を入れた将也は

「あそこのお寺かあ」

「なんだよ。お寺つて」

車を降りた信一が言った。

「まらあそこの」

「そう言つて将也はゆびを指した。

レンタル店に来るのは何時も夜だった事もあり、彼自身気にとめた事はなかつた。

「何？ もしかして前に言つてた人形供養のお寺か？」

「ああ、たぶんな。あそこの寺だ」

「そう言えば、及川も近所の飲み屋で聞いたって言つてたよ。この辺りじやあ有ねじりいぞ」

「へえ」

「お前が住んでた頃は無かつたのか？」

「さあ、どうだつたかな」

そう返した将也はふと気が付いた。

あそこのお寺の和尚が大通りのコンビニに出入りしているという事は、この通りから仕事場には近い？ この道を使えば通勤にも近いのでは？

と思つたのだ。

「なあ、この場所つて、大通りに近いのか？」

信一に尋ねる。

彼は何時も社用のバンで通勤しているが、やつぱり将也と同じ道を使つてゐるのだ。

「ああ、この裏の住宅街を抜けると直ぐなんだけど」

そこまで聞いて、将也は「じゃあどうしてみんなこの道を使わないのか」と訊こうとした。

しかし、信一の話は続いていた。

「でもさ、一方通行が多くて、車じやあ向こうへ抜けられないんだ。車で抜けられる道は、だいぶ先だぜ」

なるほど、だから和尚は歩いてあのコンビニまで来るが、だれもそこを抜けて仕事場へ行かないのだ。

「この辺だけ古い区画のままらしい」

信一はそう付け加えた。

「古い壁画？」

将也はそう言って周りを見渡す。

そうか、あのお寺は小学校のプール脇の墓地の先に小さく見えていたものだ。おそらく大きく立て替えたのだろう。

学校のこちら側はあまり記憶に薄いし、このビデオショップがある事と、どうやらお寺も建て替えたらしいのを除けば、なるほど何となく家並みに見覚えがある。

……確かに、阿部博子という当時学年一押しの美少女が、この辺りに住んでいたと記憶している。

家を突き止める為に、放課後にこつそり友達数人と尾行した事があるのだ、

将也がそんな考えを巡らしているうちに、信一はさつとレンタルショップに入つて行つた。

将也はそれに気付くと、自分も足早に店の自動ドアを潜つた。

12ノ夜【夢の中】

その夜、将也は夢を見た。
あの少女の夢ではなかつた。

その中で自分は人形を握り締めている。

全長25センチほどのそれは、長い黒髪のきれいな、真っ白な肌の人形だつた。

塩化ビニールというよりは、プラスチックのようなカタイ素材で出来ていた。

黒い瞳に長い睫毛は、西洋造りの為か多少日本人離れしているが、明らかに日本の少女を現した物だ。

白いブラウスに紺色のスカートは制服ではないが、清楚感をかもし出す為のアイテムなのだろう。

将也は自分がどうしてそんな人形を持つているのか不思議だつた。二十五歳にもなつて、いや歳は関係ないとしても今の自分に人形を集めれる趣味は無い。

しかし、自分の手を見てさらに疑問が沸いた。

自分の手が、妙に小さい。

これは……俺の手じゃない。いや、俺の手なのは確かだが、今現在の自分ではないと思つた。

その考えにリンクするように、夢の中で昔の記憶が蘇えつた。

将也は小学校の頃、確かに黒髪のきれいな人形を持つていた。

その頃の将也は何故かぬいぐるみなどが好きだつたが、別に少女趣味な訳ではなかつた。

たまに見かける白バイをカツコイイと思つたし、テレビで人気のロボットアニメも欠かさず観ていた。

彼は動物が好きで、その流れで毛に覆われたぬいぐるみが好きだつたのだ。

しかし、人型の人形はそれしか持つていなかつた。

昔から女児むけの着せ替え人形はあるが、モデルが子供なのに目立ちが妙に外人っぽくて氣味が悪いと思っていた。

逆に純日本人をモデルにした人形と言えば、伝統的日本人形だが、それはそれで余計に氣味が悪い。

だから将也は人型の人形にはあまり興味を示さなかつた。

しかしその人形は、ちょうどアニメに出てくる日本の美少女のようで、日本人形のようにおかっぱ頭でもなく、ソフトビニールでできた着せ替え人形のように仰々しい顔つきでもない。

体は少し硬い素材で出来ており、腕と足の付け根の間接だけが僅かに動いた。その反面長い髪の毛は風に靡くほど柔らかかつた。少し大きめの黒い眼差しは、何処か涼しげに彼を見つめ、その表情がやたらと将也の心を掴んだのだ。

ただ、どうやってそれを手に入れたのか記憶が無い。

買って貰つたわけではないから、誰かに貰つたのだろうが、何時、誰に貰つたかまでは思い出せなかつた。

おそらく小学校の時には既に、その記憶を無くしていた気がする。そして小学校四年生にもなれば、そんな人形には目もくれないだろう。

そんな頃に転校が決まり、引越しの準備をしていた将也は、本棚の一番上に置いたままになつていたそれを久しぶりに手に取つた。貰つた時の喜びなどは忘れていたが、しばらくの間自分が大切にしていた事は覚えている。

将也はどうしようか迷つっていた。

いらないものは極力処分するように、母親に言われていたからだ。自分が大切にしていた人形なのは充分判つている。しかし、この先この人形が自分にとつて必要かと聞かれたら、それはNOだつた。人形やぬいぐるみよりも、その頃の将也にとつてはF-1マシンの方がよほど興味があつた。

彼は引っ越し当日まで悩んだが、けつきよく捨てるに捨てられず、しかし引越し先に持つて行く気にもなれずに、庭のかた隅に隠すよ

うにそれを置いてきた。

その後この地を訪れていない将也には、その人形がどうなったかはまったく知る由も無い。

しかしその時、手に持っている人形の瞳が動いた。
長い睫毛に縁取られた橢円形の目の中にある大きめの瞳は、黒々と虹彩を輝かせて確かに将也を見つめた。

そして、小さな唇が突然動いた。

「どうしてあたしを捨てたの？」

将也は思わず人形を放り投げるよう手から離した。

一度二度小さくバウンドして地面に転がったその人形は、半分うつ伏せのように斜め下を向いていたが、黒い瞳ははつきりと横を向いて将也を見つめ続けた。

乱れた黒髪が頬を半分隠していた。

「どうして捨てたの？」

再び、小さな唇は動いた。

黒髪で隠れた頬が動き、髪の毛の隙間から動く唇が確かに見えた
のだ。

目を見開いた時、ほの暗い天井だけが見えた。

将也は声も出さずに、いや息を詰まらせるようにして目を覚ました。

仰向けに天井を見上げたまま、肩で息をしていた。
静寂が時を止めたかのように、自分を呑み込んでいる。
の人形の顔が脳裏に焼きついていた。

今まで忘れていた顔を、今鮮明に思い出していた。
透き通るような白い肌に少し睫毛の長い目の輪郭。
その中で輝いていた吸い込まれそうな黒い瞳。

そして輝き放つ長くて柔らかい黒髪。
それは誰かに似ていた。

その誰かの顔は直ぐに浮かぶ。

さつきまでこの部屋にいて一緒に夕食をとつたのだから。
そして入浴の後一人は身体を交え、彼女は遅い時間に帰つて行つた。

将也はその一つの記憶を照らし合わせる事が怖かった。

しかし、同時にこうも考えられる。

彼が玲美の事を想うあまり、過去の記憶と混合して彼女の顔が人形の顔として夢に現れた。

だいたいここしばらくは若い女性と言えば玲美としか接觸していないのだから、夢の中の女性、いや女性の姿の人形の顔が玲美に似てもおかしくないのではないか。

それが、人の心理というものではないのか。

将也是無理やりそう自分に言い聞かせる事で、夢の中の人形が玲美に酷似している事に納得していた。

13ノ夜【届け物】

昔持つていた人形と玲美の顔が似てるのは、潜在意識のいたずらだ。

そう考える事にした将也だったが、それとは別に確かめたい事はあつた。

朝早く仕事場へ行つた彼は、事務所にある地域地図を広げた。市内に高校は三つ。隣接する町を含めると七つ存在したが、とても自転車で行ける距離ではない。

自転車で行けるとなるとやはり地元の三校だった。

将也がよく見かける一校は確かにこの現場からほど近い場所にある。

そしてもう一校は国道を渡つた先に在るらしい。

玲美が通つている高校はそこだろうか……。

将也は未明に見た夢以来、彼女が何処の学校に通つているのか、無性に気になりだした。

玲美の学校と自宅が確認できれば、どんなに彼女の姿が人形に似ていようが全く気にしなくて済む。

……人形が？

そもそもそんなはずある訳無いではないか。

自分が捨ててしまつた人形にたいする罪悪感が知らぬ間に蘇えり、謎めいた玲美と掛け合わされているのだと、将也は思つた。

仕事が始まつても将也の頭は玲美の学校の事でイッパイだった。

何故彼女は自分の事をあまり話さないのだろうか。確かに何か詫ありっぽい事は覗える。

何か家庭問題を抱えて家にはあまり帰りたくないのかもしない。

しかし、通つている学校も教えないと言つのはどういう事か？

「中村さん」

後輩に声を掛けられて我に帰る。

「何だ？」

「この上の配線はどっちの柱を這わせますか？」

まだパネルの張られていない天井部分に身体の半分を突っ込んだ状態で及川辰彦が言った。

「ああ、それは手前より奥の柱を使え。その方がスイッチのパネルに近い」

「判りました」

及川はそう言って一端脚立を下りると、場所を異動して再び高い脚立に足を掛けた。

将也は気を取り直すと、テナント部分の壁面にスイッチのパネルを取り付け始めた。

昼夜近く、将也の携帯電話が鳴った。
敷地内にある事務所からだった。

「はい」

「おお、中村か。お前に来客だぞ」「出雲主任の声だった。

「来客?」

「お前、出張先なんだからたいがいにしどけよ」

主任はフツと笑い声を上げて

「とにかく一端降りて来い」

そう言つて電話は切れた。

……こんな所に来客？ そう思つた瞬間嫌な予感が頭を過つた。
エレベーターで一階まで降りて、敷地に出るとフレハブ小屋の前に白いブラウスに紺色のスカート姿が見えた。

やつぱり……

今朝、将也は何時もより三十分早く家を出た。もちろん、事務所

で地図を見るためだ。

そして、何時もと違う時間に家を出た為、玲美とは会っていない。

だから、今日は彼女の弁当を貰つていないので。

将也の姿を確認した玲美は、遠くから手を振つた。

何だか足が重い……将也は彼女に近づくにしたがいそう感じた

「やあ、どうしたの？」

「お弁当」

玲美は笑顔でやう言つと、何時ものようにバンダナで包まれたものを差し出した。

「わざわざ届けてくれなくてもよかつたのに」

「ダメよ。あなたの為に作つたんだから」

将也は弁当を受け取ると

「学校は？」

「自転車だつたから抜け出して来た

「歩いて？」

将也は玲美の周辺に自転車らしきものが無いのを既に確認していた。

「いいじゃない、そんな事どうでも」

彼女はただ笑つてそう応えると

「じゃあ、お仕事頑張つてね」

そう言つて敷地を歩いて行つた。

将也は、彼女が途中で消えてしまつたのでは無いかと後姿をじっと目で追つた。

「よう、中村

プレハブ事務所の窓から出雲主任が顔をだした。

「お前、高校生相手にしてんのか？」

やけにニヤついた表情を将也に向けていた。

「違いますよ。彼女は近くに住んでる親戚の娘です」

「ああ、そう言えばお前、昔この辺に住んでたつて言つてたもんな

「ええ、親戚がまだ近くにいるんです」

「へえ、しかし出張先で手作り弁当とは羨ましいな」

主任は笑いながらタバコの煙を空に向つて大きく吐き出した。

「じゃあ俺、仕事に戻りますんで」

あまり彼女の事を詮索されないうちに、将也はそう言って彼に背を向けた。

とつさに出た嘘だつたが、昔この辺に住んでいた事を知っている主任はそれを真に受けてくれたようだつた。

歩きながらふと敷地の遠くへ視線を向けたが、玲美の姿はもう何処にも無い。

彼女が歩いて行つた方角は大通りが通つているが、その歩道にも彼女の影は無かつた。

たつた一、二分主任と話している間に、彼女は何処かへ消えていた。

そう、歩き去つたのではない。消えたのだ。
将也は手に持つた弁当を見つめた。

14) 夜【懐かしき声】(前書き)

14ノ夜【懐かしい声】

将也はその日の仕事を終えた帰り道、大通りから繋がる国道を何時もと反対方向へ曲がった。

しばらく行つた道を左へ入ると、小さな住宅街があつた。その中を抜けるように車を走らせると、直ぐに白い校舎が見える。

「あれだな」

将也は咳くと同時に、腑に落ちない気持ちだつた。

先ほどから何度も見かける女子高生はやはりあの学校の生徒だろう。

将也のアパート近辺から自転車で通える距離にある、残りの一校。その制服は、玲美れみのものとは異なつていた、

将也は学校の正門近くに車を止めて様子を覗つた。

この学校に部活の練習試合か何かで来た他校の制服かもしれない。そう思つたからだ。

しかし正門から出てくる生徒の姿は一緒だつた。

三角形の大きな衿をした変則的なセーラーのようなブラウスに緑色のショートなネクタイを着けている。

スカートは紺と緑色の混ざつたタータンチェックだつた。

玲美のシンプルな制服とは全然違つてゐる。

……いつたい玲美は何処の誰なんだ。いつたい何処の高校に通つてゐる?

将也は内心、そんな考えは無意味なのではないかと思い始めていた。

夕方の湿つた風とは関係なく、彼の背中には汗が伝つていた。

アパートへ帰ると自分の部屋に明かりが点いていた。
玲美が来ているという事だ。

将也は車に積んであつた小さなMAGライトを手にとつて車を降りると、アパートへは向わずに少し先の路地へ歩き出した。

……玲美が車の音で、自分の帰宅に気付いたかもしれない。まあいい。適当に何か言い訳を考えておこう。

将也是、アパートの自室の明かりを見上げながら、路地の曲がり角へ急いだ。

路地を曲がると普通の民家が立ち並んでいた。

何の変哲も無い、二階建ての民家だ。

玲美はいつもここの路地に入る。それからどうするのだろう。

アパートの裏手と言つていた事を将也是思い出していた。すでに将也のアパートの背面にある通路が見えていた。

……この辺も裏手になるのだろうか。

そんな事を思いながら、将也是再び路地を左に曲がった。もう民家の影でアパートは完全に見えなくなつていったが、これで完全に一本裏の通りに出た事になる。

少し小さめの水銀灯が暮色の家並みを薄つすらと照らしていた。

そこで、将也是重大な事を思い出す。

玲美の苗字はなんだ？ この通りにもし玲美の家があつて、表札が出ていたとしても彼女の苗字を知らなければ探しようが無いではないか。

そう思いながらも将也是路地を前に進んだ。

持つて来たMAGライトはまだスイッチをいれていない。

それでも充分に見える明るさはあつた。

庭のガレージに玲美の自転車をさがす。ありふれた仕様のあの自転車が、彼女の家を示すとはとうてい思えなかつたが……。

向こうの通りへ出るまでのちょうど真ん中辺りに来て将也是足を止めた。

家と家の間に少しの隙間といつか、空間を見つけたのだ。

何かが在るが、街路灯の僅かな光がちょうど手前の電柱に遮られ

てよく見えなかつた。

陽は沈みきつて、暗闇が視界を妨げる。

最初は「ゴミ」の集積所かとも思ったが、そうではないらしい。

将也はM A G ライトの電源を入れた。地面を照らす白い光の帯をその先に向つて動かす。

光の中に何かが浮かんだ。

「これは……」

お稲荷さんを祀る古い祠ひいしばが紅い小さな社やしろに囲われるように存在していた。

囲つた社に見覚えは無かつたが、その中の祠は将也の記憶を遠く幼い日々へ連れ出した。

.....

「たま姉ちゃん、これ何?」

「それは、お父さんがオーストラリアのお土産に買っててくれたものよ」

「ふうん」

「マー君、気に入つた?」

「うん。かわいいね」

「じゃあ、マー君にあげる」

「ほんとう?」

「うん。その代わり、ずっと大切にしてね」

「うん。ずっと大切にするよ」

.....

近所に住んでいた年上の娘は確かにたま美と言つた。

.....

.....

幼かつた将也にはどんな字を書くのか解らない。

彼がまだ小学生に入る前からよく遊んでくれた彼女は三歳年上で、
彼の家の裏側数件後ろに住んでいた。

彼女の父親がオーストラリアで買つてきたと言つ黒髪の人形は、
幼い将也の目をクギ付けにした。

たま美は惜しげもなくそれを将也にくれた。ずっと大切にすると
いう約束と共に。

それがあの人形だ。

たま美……苗字は思い出せない。

そして、どんな顔をしていたかも……。

彼女は今どうしているのだろう。

将也が小学校に入つて直ぐの頃は、まだ一緒に遊んでいた。そし
て、いつの間にか顔を会わせなくなつた。

それが何時ごろ、どうしてなのかは判らない。

いくら記憶の奥を探つても、黒い闇が取り巻いてそこには辺り着
けなかつた。

辺り着けないという事は、僅かながらでも記憶の何処かに彼女が
自分の前からいなくなつた理由を知つているような気がしてならな
かつた。

しかし、どうしてもそこには辺り着けない。

何がが邪魔をして、その記憶を閉ざし、辺り着く事を拒んでいた。
このお稲荷さんは、昔将也が住んでいた家の一本裏手の通りに在
つたものだ。

そしてその横の家にたま美は住んでいた。

将也は一階建ての家屋を見上げた。

記憶に全く無いその家は、たま美の住んでいた家ではないだろう。
しかし、将也は辺りを見回した。

「ここは……」

当時の家は残っていないし、この通りももつと狭くて車が一台よ
うやく通れる広さしかなかつた。

おやじが画整理の際に拡張したのだろう。

そして、住宅もほぼ全て建て替えられたのだ。

しかし、お稲荷さんはそのまま残したのだろう。古い土地の画

整理ではよくあることだ。

だからここは……。

「ここは俺が住んでいた場所だったんだ」

将也はそう咳きながら振り返って家並みの向こうを見つめた。

お稲荷さんの場所を基点に、当時の位置関係が鮮明に蘇えった。

「あのアパートだ。ちょうどあそこに俺の家は在ったんだ」

将也是走り出すと先の路地を曲がってアパートの前に戻った。

アパートは少なくとも普通の家一件分の敷地はあるので、おそらくは隣の家だつた場所も含まれているだろうが、そこはまさしく彼が小学校四年の時まで過ごした場所だった。

駐車場の場所には何が在った？ 将やは記憶を巡らせた。

空き地だ。

家の前はただの空き地で低い雑木で囲われて、時々工事用のブルドーザーなど、重機が置いてあった。

将也是思わずアパートの敷地の隅々をMAGライトで照らしていく。

た。

その昔、隠すように置いていった人形。

の人形が無いか探していたのだ。

土地も建物も全く変わってしまったこの場所に、ましてや一五年の歳月が流れたと言つのに、そんなものが同じ場所に残っているわけは無かつた。

「もう無いのよ。マー君」

将也は後から声が聞こえて、慌てて振り返った。

14ノ夜【懐かしい声】（後書き）

淀んだ記憶とともに、黒色の秘密が蘇える……。

声の主は…

玲美は誰なのか……。

お読み頂き有難う御座います。

少しづつ話しさは展開してゆきます。

15ノ夜【水面】

「もうそこにはあの人形はないわ
そこに立っていたのは玲美れいみだった。

アパートの階段を下りた場所で、小さな常夜灯に照らされながら、そよぐ風に黒髪を揺らしていた。

いや、実際は風など吹いてはいなかつた。

「キミは、たま美姉ちゃんのか？」

将也はそう言つて直ぐ、それを自分で否定した。

「いや、そんなわけがない。彼女は俺より三歳年上だつた。いま高校生のわけがないんだ」

将也は自分でも気付かぬうちに、後ろへ少しづつ下がつていた。

「キミは誰なんだ。どうして俺をそんなふうに呼ぶんだ」

「あたしよ、マー君」

玲美は静かに笑つた。

「違う。違う」

将也はぶるぶると首を横に振る。

「あなたがあたしを捨てたからよ」

「何を言つてるんだ。俺が捨てたのは人形だ」

そう言つた将也は自分の言葉に背筋が凍りついた。

「お前は、やっぱりあの人形だったのか？」

そんなバカな事があるかと思ひながらも、つい出した言葉だ。

「あたし、探したのよ。マー君」

「探したって、何を」

「マー君の家よ」

「俺の家？」

「探したわ。人形と一緒に」

「人形はお前だろ」

将也の声は震えていた。

「マー君……」

「その名で俺を呼ぶな

将也は思わず叫んだ。

闇に閉ざされた記憶が蘇えった。

その名で呼ばれたくない。

太い鎖でがんじ絡めに封印された記憶。

幼かつた将也が自己の精神を防衛する為に深く葬り去つて鍵をかけ、自分すら辿り着けないように固く閉ざした記憶。

……思えば、たま美もまた黒髪の美しい少女だった。

「マー君、危ないよ。ここは入っちゃいけないって書いてあるんだよ」

「だつて、ここの方が大つきなザリガニがいるんだよ
小学校一年になった将也は、たま美と一緒に大きな堀の岸辺にいた。

その堀は水田に水を引く水路に繋がる為、何時も水位があつて危険な場所として指定された区域で、両脇は金網で囲われて立ち入り禁止になっていた。

しかし、こういう場所は誰かが必ず忍びに入る。

その誰かの開けた金網の小さな穴は、子供たちの冒險心をくすぐるのだ。

夏休みのある日、学校の友達の家に遊びに行つた帰り、たま美はその堀にいる人影が将也だと知つて声をかけたのだ。

黄昏の迫る田んぼ周辺の草むらから、カエルの鳴き声が聞こえていた。

彼はいつこうにそこから出る気が無いので、仕方無しにたま美も金網の小さな穴を潜つた所だった。

「ここは水が深いから危ないんだよ」

「大丈夫だよ」

そう言つて将也が覗き込んだ先には、赤々と大きなハサミを振りかざすザリガニがいた。

将也は持つて来た小さな網を静かに水中へ忍ばせた。それに気付いたザリガニが、水草の茂る泥の中に素早く逃げ込もうとした。

将也はもつと深く網を入れる。その時彼の靴が湿った土で滑り、体ごと堀の中に転げ落ちた。

「マー君」

飛沫を上げて水の中に投げ出された将也を見たたま美は、声を上げた。

慌てて周囲を見渡すが、夕暮れの中に入影は無かつた。

「マー君」

バシヤバシヤと水を激しく叩いて暴れる将也に向つて、たま美は懸命に手を差し出した。

しかし、その手は全く届かない。

後に掘まる場所もないから、思い切つて身体を伸ばせないのだ。

「マー君」

「たま姉ちゃん……」

小学一年生の将也にはその堀はあまりにも深かつた。

水草の生える岸辺は浅いのだが、人工的に削つた水路の中央は急激に深くなっている。

たま美は思い切つて水に飛び込んだ。

泳ぎは決して得意ではなかつたが、自分を慕う将也を助けないわけには行かなかつた。

少女の中に眠る確かな母性本能が、そうさせたのかもしれない。

「お姉ちゃん」

「マー君。しつかり」

沈みかける将也をたま美は必死で支えようとした。洋服があつという間に水を吸つて、思いの外身体が重くなる。

浮力に逆らって、身体が沈み込むとする。

「早くこっちへ。頑張って上がるのよ」

将也はたま美に押されるようにして必死で堀の岸辺を這い上がった。無我夢中で伸びきった雑草にしがみ付いた。

岸辺の泥が足をすくい、踏ん張る事ができない。

濡れた手がすべり、やつと掘めたかと思うと雑草はブチブチとちぎれて、なかなか前に進めなかつた。

何度も草を掘む手は、その葉で切られ赤い血が滲んでいたが、そんな事を気にとめる余裕は無かつた。

後から必死で押し上げる力が加わって、将也は何とか岸に這い上がる事が出来た。

ほとんど力尽きていた。

たくさん水を飲んだ為に気持ちが悪い。

ずぶ濡れの顔を、涙が止め処なく伝う。

手足は岸辺の泥で真っ黒だつた。

そして、将也がようやく息を整えて後ろを振り返った時、堀の水面は静かに波打っているだけで、たま美の姿は何処にも無かつた。

暮色に染まる小さな雑木林から、ひぐらしの声がけたたましく鳴り響いていた。

16ノ夜【誘い】

将也の頬を涙が伝っていた。

自分では、何時の間にか彼女と遊ばなくなつた理由は判らないと思つていた。

彼女が何処かへ引っ越したか、それとも大きくなつた為に小さな自分とは遊ばなくなつたのか。そんなふうに勝手に考えていた。たま美は彼を救う為に全ての力を使い果たして、暮色に染まる褐色の水の中に沈んでいったのだ。

将也是その事を家人には言わなかつた。
彼女の家族は心配して周囲を探し続けたが、当然たま美は見つからなかつた。

翌日警察に捜索願が届けられ、その二日後の朝、彼女は立ち入り禁止の立て札のある水路の中から発見された。
そして将也是自分に対する罪悪感を消し去る為に、記憶そのものを封印したのだ。

それは人が生きてゆく為に必要な、防衛本能が生み出す逃避行動だ。

「俺……俺、怖かったんだ。怖くてどうしようも無くて、たま姉ちゃんの事いえなかつたんだ」

将也是子供のように泣き叫んだ。

「いいのよ。マー君」

将也是何時の間にか玲美の胸に抱かれていた。

自分から歩み寄つて彼女の前で膝を着いた。

玲美も同じく歩み寄つていた。そして、その胸に将也の頭を抱え込む。

「いいのよ」

優しく彼女の声が、将也の頭蓋に響く。

「ボクが家の人に教えていたら、たま姉ちゃんは死ななかつた?」

「もう手遅れだつたわ。だからマー君のせいなんかじゃないのよ」

玲美は優しい口調で言った。将也は彼女の身体にしがみ付いた。

「大丈夫。大丈夫よ。マー君」

玲美の手が、将也の短い頭髪を撫でた。

「行こう」

彼女は静かに言った。

「行くつて……何処に？」

将也は玲美を見上げた。

「あたしと一緒にいいでしょ。一緒に行こう」

玲美が将也の手を掴んだ。

ひんやりと冷たい感触が将也の手に沁み込む。

果然と彼女を見つめる将也は、人肌とは違つ異様な温もりを感じていた。

「ダメだ」

将也は我に帰つて彼女の手を振り払つと、その場に立ち上がった。

「俺は行けない」

「どうして？」

今度は玲美が将也を見上げていた。

「俺は死んでない」

「死んでなくても大丈夫よ」

彼女は口角を上げて微笑むと、その言葉に付け加えた。

「大丈夫、これから死ねば」

玲美は、再び将也の手を掴んだ。その力はさつきまでの優しさの欠片もなかつた。

「やめろ」

将也はそれを振り払おうとしたが、玲美の力はとてもなく強くてビクともしない。

「あたしと一緒に行こう」

彼女は将也の身体ごとその手をズルズルと引っ張つた。

優しい笑みとは裏腹に、その力は暴力的だった。

「違う、お前は人形だろ。お前はたま姉ちゃんじゃない」「私がたま美よ。人形の魂と融合したのよ」

「融合？」

思わず抵抗する将也の動きが止まる。

「あたしが死んだ時、その魂はマー君にあげた人形に転移したのよ」
「ワソニ」

「五」

ほんとうな、それなのに、あなたはそれを捨てた

広がつて逆立つた。

将也は彼女の手を振り払おうとしたが、手足に脱力感が広がってきて、何時もと同じ力が出ない。

「やあか、やあか、ひあせ、ひあせ」

正、反、正、反、正、反、正、反、正、反

卷之三

ドアチャイムの音に混ざって再び何かを激しく叩く音。

正、反、左、右、上、下

卷之三

遠くで自分の名を呼ぶ声が聞こえる。

将也は目を見開いた

眞田方世界万邦で這生一歩が
ア芝ハ解キ三一六相ノ品

そこはアパートの自室。

彼は床に仰向けて横たわっていた。

アーティストとしての才能を発揮する機会を得たことは、彼の人生にとって大きな意味を持った。

にも無かつた。

アーティスト……再び誰かついで、われがアーティストだとみなされ

やく気がついた。

「おー、どうしたんだ。将也！」
玄関の外から信一の声が聞こえていた。

16ノ夜【誘い】（後書き）

お読み頂き有難う御座ります。
次回、最終話です。

最終ノ夜【蒼穹】（前書き）

最終話です。

今回も、少し長めの物語を少しづつ読み上げだせ。

最終ノ夜【蒼穹】

将也は慌てて立ち上ると、玄関のドアを開けた。

「どうした。凄い叫び声が聞こえたぞ」

信一がそう言いながら、部屋の中を覗いて

「誰かいるのか？」

「いや。誰もいない。今は……」

「今は？」

将也是信一に言葉も返さずに部屋へ戻つて中を見渡した。

「玲美、いるのか？」

将也是部屋の中央で小さく叫んだ。

「おい、どうしたんだよ。将也」

彼の様子を見て、信一が玄関から上がつて来た。

「あの人形が何処にあるのか？」

将也是部屋の中に語りかけた。部屋を見渡しても人形らしきものは無い。

隠せるような収納は一箇所だけ。

将也是クローゼットを勢いよく開けた。

中は真ん中で上下に仕切られて、通常の押入れと同じ造りになっている。下の段にはダンボールに入つたままの着替え。

そして上の段にはハンギングした夏服が掛けある。

それをかき分けて奥を覗いた。

一番奥の隅に 黒髪の人形が淋しく座つていた。

間違いない……幼い頃にたま美に貰つて、引越し当日にここへ置き去りにした人形だつた。

将也是それを手に取ると、後にはいる信一に声も掛けずに部屋を飛び出した。

何がなんだか判らない信一は、将也の行動をただ見てはいるだけだった。

「おい、いったい何なんだ？」

信一の声が背中から聞こえたが、応える余裕が将也には無かつた。外へ出ると、駐車場の車に乗り込んであるお寺を田舎した。

途中でふと車内の時計を見る。

一時二十分と表示してあるが、この暗さはどう考へても深夜の一時だらう。しかし、将也はそのまま青雲寺に着くと、人形を手に住職をたたき起こした。

「すみません。お願ひがあります。すみません」

境内の横にある平屋の自宅のチャイムを何度も鳴らした。少しすると玄関の明かりが灯り、擦りガラスの向こうに人影が見えた。

「どなたかな、こんな夜分に」

「すいません、夜分遅くに。ただ、無くなつた人形とはこれではないかと」

将也は思わずガラス越しに人形をかざした。直ぐに引き戸が開けられ、そこにはやたらと似合わないパジャマ姿の住職が立っていた。

「無くなつたのは、この人形じゃないですか？」

和尚はそれを見てすぐ

「これを何処で？」

「俺の部屋です」

「あなたの部屋に？」

和尚は困惑した表情で将也を見つめると、自分の坊主頭を撫で上げた。

「なるほど、あなたの所へ行く為にここを抜け出したのでしよう

* * *

将也に事情を聞いた和尚は、穏やかに領きながらお茶を差し出した。

彼の話を全く疑う様子は無かった。

「これは何時」「いろ、誰がここへ？」

将也は喉がカラカラだつた事に気付いて、熱いお茶を啜つた。

和尚も目を細めて湯飲みを啜ると

「これは確か……もう十五年くらい前に、土建会社の人が持ち込んだと記憶しています」

人形に張られているはずの、持ち込まれた年月日を記載した紙はもう無くなっていた為、和尚の記憶だけが頼りだつた。

「土建会社？」

「区画整理をする業者だと聞きましたね」

「どうして区画整理の業者が？」

「取り壊した家の庭で見つけたらしいです。小奇麗な人形だと、こここの噂を聞いて持つて来たようでした。人形の祟りがあるトイヤダから供養してくれとかも言つてましたね。ヒゲ面の男がそんな事を言つたので、すごく印象に残っています」

人形が小奇麗だったという事は、将也の一家があの家を出て間もなく区画整理が始まつたのだろう。

もしかしたら、区画整理での土地買収に乗つかつて、自分の家は引っ越したのかもしれない。その方が家の売買の手間が省ける。

「しかし、人形とその娘さんの両方の念が込められていたとは、もう一度供養しなおした方がよさそうですね」

和尚はそう言つて立ち上がり、将也を率いて境内につながる廊下を歩いた。

「魂が融合したってのは、本当なのでしょうか？」

境内へ向う途中、将也はいまひとつ信じ切れない疑問を和尚の背中に投げかけた。

「一つの物体に幾つもの魂が宿る事は、よくあることです」「よくある？」

「それは互いに拒絕し合う事の方が多いが、この人形は元々の持ち主をすんなりと受け入れたのでしょうか。いや、彼女が入り込んだからこそ、人形の魂が目覚めたのかもしませんね」

和尚はそう言つて振り返ると、穏やかに笑つた。

境内の奥に在る人形供養の間に入ると、和尚は祭壇に人形を乗せて口ウソクに火を燈す。

線香にも火を焚くと、淡い紫色の煙の中でお経を唱え始めた。将也はしばしの間、読経を聞きながらその光景を後から眺めていた。

燈した香の匂いが辺りに立ち込める中で、玲美の笑顔を、いや、たま美の笑顔を思い出していた。

ぽかぽかした陽射しのように暖かい笑顔が、何度も蘇える。

「応急処置は終わりましたよ。後は夜が明けてからで大丈夫でしょう」

経を唱え終わった和尚は、そう言つて微笑んだ。

和尚の微笑を見て、将也も思わずホッと息をつく。

「そう言えば、もう一体人形が無くなつたつて」

将也は、ふとそんな事を思い出した。

「ああ、それは戻つて来ましたよ」

「戻つて來た？」

「数日後に、元の場所にいたんです。ほら、ここに」

和尚に指差されてそれを見た将也は思わず驚愕した。

それは女の子向けの洋風の着せ替え人形で、何種類も時代を重ねる事によつてコレクターも存在するという名の知れたものだつた。

しかし、彼が驚いたのはそんな事ではない。

少し日焼けした肌にショートカットの黒髪。

おそらくこの人形には黒髪は珍しいかもしれない。

それはまさしく、以前将也が見た雪乃という玲美の友達にそつくりだったのだ。

もちろん、あの制服を着ていたわけではないが……。

玲美はここから友達として自分に紹介する娘を持ち出したのだと思つた。そして、後でちゃんとここへ返しに来たのだ。

* * *

あれから十日が過ぎた。

あの日の翌日、本格的に人形供養をすると聞いて、将也はそれに立ち会つた。

「彼女はあなたにもう一度会いたかつたのでしょうか」「俺ですか？」

「あなたにあげた人形に魂を宿して待ち続けた。いや、本人の言うとおり、彼女は死後すぐにあなたにあげたこの人形に宿っていたのかも知れない。そしてあなたを見守つていたのかもしれませんよ」和尚は穏やかな口調でそう言つた。

「そうか……だから、彼女は捨てられたと怒つっていたんだ。あれは、人形の想いであり、たま美の想いでもあつたというわけだ。

「一緒にいるうちに、もつとずっと長くあなたといたくなつたのでしちゃうな」

「ずっと……ですか」

彼の言葉に、和尚は再び笑顔で頷いた。

「彼女を動かしていたのは、怨念などではありません。強い情です 将也は、読経する和尚の背中越しに祭壇上の「玲美」を見つめ、何時の間にか涙を流していた。

そう、あの人形はたま美の魂と融合した事で生まれた「玲美」なのだ。

もつと近くに、もつと一緒に。

彼女がそう願つたのは確かかもしれない。
ゆめうつ
夢現の中自分で自分と戯れるうちに……。

将也は何故か、彼女に対する恐怖を感じなかつた。

それから玲美は姿を見せないし、あの悪夢も見ていない。

ただ不思議なのは、どうして彼女は玲美と名乗つたのだろう。いつたいその名前を何処から取つたのか、将也は何気に疑問を感じていた。

仕事は順調に進んで8月も終わる頃、現在実家の在る茨城から一本の電話が入つた。

「ああ、将也。今月の30日……判る?」

母親が言つた。

「何?」

「やつぱり覚えてないよね。ほら、昔よく遊んでもらつたたま美ちゃんの命日だから。あんたついでだからお墓にお花供えてあげなさい」

将也はたま美の死が何時だったのかまでは思い出せないでいたが、母親からの電話で記憶に眠る最後の一滴を思い出した。

そうだった。

あれは、あと一日で夏休みが終わるといつ日だつた。

たま美の家は、彼女が亡くなつてしまふと引っ越し越して行つたらしい。

その後は将也の母親が命日や彼岸に墓参りをしていたが、たま美の両親は見かけた事が無いと言つ。

当時ひどくショックを受けた様子の将也には、内緒にしていた事だ。

だから余計にたま美の記憶は将也から遠のいて消え失せたのだろう。

将也は母親に言われたとおり、たま美の墓参りに行つた。

それは小学校のプールの横に広がる青雲寺の墓地の一画に在つた。

山ほど菊の花を買って、将也は彼女のお墓にそれを供えた。

あの時彼女が身を呈して救つてくれなければ、自分は今ここにでこうしてはいなかつただろう。

褐色の水に深く沈んでいたのは、自分だつたに違いない。

和尚はこの前の事があるので、特別にお経を上げてくれた。

線香の束から煙る香の香りが辺りを白く取り巻いて、周囲から降り注ぐセミ時雨に溶けてゆく。

将也は目を閉じて静かに手を併せた。

今自分にできる事は、それくらいしかないので思つた。

そして彼女の墓石に刻まれた文字を見たこの時、自分の前に現れた少女がナゼ玲美れみと名乗つたのか、その謎がなんとなく解けた気がした。

『竹内玲美享年11歳』

……たま美の字は玲美と書くのだ……。

彼は何も意識しないまま、自分の頬を勝手に伝う涙の零を感じていた。

頬を伝う熱いものが、ぽたりぽたりと重力に引かれて落下する。空は青く澄んで、少しだけ雲が高くなつたようだ。

将也が零した零は、残暑の陽差に照らされた黒い御影石に幾つかの跡を残したが、それはあつという間に蒸気となつて熱い大氣の波間に消えて無くなつた。

了

最終ノ夜【蒼穹】（後書き）

最後までお読み頂き、有難う御座います。
ホラーとしては物足りなく感じる方も多いかもしれません。
でも、私はほろ苦いようなホラーが、意外と好きで…。
それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0312f/>

月影のDOLL

2010年10月8日15時52分発行